
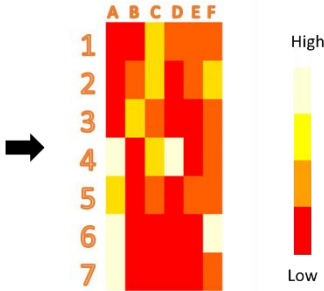


「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 27 年 5 月 7 日	
所属部局・職	統合脳システム・修士課程学生
氏名	田辺 創思

1. 派遣国・場所	
宮崎県串間市幸島	
2. 研究課題名	
生態学野外実習	
3. 派遣期間	
平成 27 年 4 月 25 日 ~ 平成 27 年 5 月 1 日 (7 日間)	
4. 主な受入機関及び受入研究者	
京都大学幸島観察所	
5. 所期の目的の遂行状況及び成果	
<p>写真（必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの）の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p>今回私は修士課程配当科目である生態学野外実習の一環として、宮崎県串間市にある幸島のニホンザルの観察を行った。4 月 25 日から 5 月 1 日にわたって幸島観察所に滞在し、4 月の 26 日から 28 日にニホンザルの観察とデータの収集、29 日にデータの解析と発表準備、30 日に研究発表を行った。</p> <p>幸島では 1952 年よりニホンザルへの餌付けが行われており、ニホンザルを個体ごとに識別し個体ごとの記録を行う個体識別法を用いた調査が主に行われている。実際に本実習でも多くの学生が個体識別法による調査を行った。しかし、ニホンザルを含めた霊長類に特徴的な群れ全体の挙動を理解するには、それぞれの個体の行動を集団全体の挙動と結び付けて理解することが重要である。今回私は集団全体としての挙動を捉える方法の一つとして、給餌中のニホンザルの密度分布を網羅的に求める方法の確立を目指した。また同時に、給餌中のニホンザルの密度分布とそれを観察しているヒトの密度分布を比較することで、猿とヒトの分布に何らかの相関がないか、一般化最小二乗法を用いて検討を行った。その結果、ヒトとサルとの分布の間には有意ではないものの負の相関が見られることがわかった。このことは餌付け中であってもニホンザルはヒトとある程度距離をとって餌の探索を行っている可能性が示唆される。</p> <p>今回の実習では時間的な制約もあって明瞭な結果を得られることができなかった。しかし、今回確立した手法を用いることで、給餌条件などを変えた場合の影響やニホンザルの他個体への攻撃などがサルの密度分布とどのような相関関係にあるかなど、個体識別法と組み合わせた調査が可能になった。これにより個体レベルの情報と集団レベルの情報を統合することで、群れとしてのニホンザルの挙動をより深く理解できると考えている。</p> <p>私自身は今後フィールドワークを行う予定はないが、今回の実習を通して得た密度分布の解析手法ならびに統計の技術は、本業でも大いに役立つと期待している。</p>	
	
<p>図：密度分布の解析。餌をまく浜全体をビデオカメラで撮影し、それを計 42 のエリアに分割した。それぞれのサルおよびヒトの数を計測することで密度を求めた。</p>	
6. その他 (特記事項など)	